

月見櫓

月見櫓は、松平直政（1601-1666）の統治下であった 1634 年に建造されたものである。天守閣の 3 つの構造とは異なり、平時の建築であるため、旧来の城郭に見られるような防御的な要素はほとんどない。

大天守の狭い窓とは対照的に、月見櫓の 3 面には舞良戸が取り付けられており、この引き戸を取り外すと、大天守を一望することができる。また、天井の吹き抜けや朱塗りの縁側など、周囲の山々を望む月見の宴を催すのに使われたようである。

江戸時代（1603-1867）には、城の建設や拡張は禁止され、修理はすべて幕府に届け出なければならなかった。月見櫓は、直政が初代将軍・徳川家康（1543-1616）の孫であったことから、特別に許されたのかもしれない。三代将軍徳川家光（1604-1651）が善光寺に参詣した帰りに立ち寄り予定だったため、この塔を建てたと言われている。しかし、家光は岩盤崩落のため、別の道を通り、松本には立ち寄りなかった。

松本城は、秋に行われた月見の宴にちなんだ名前の櫓を持つ、現存する 2 つの城のうちのひとつである。また、櫓が天守閣に直結している唯一の例である。